

出会うワゴン (後期)

今月のテーマは、「好きな人物」です。史実から神話まで、様々な人物に関する本を集めました。場合によっては一人について何冊かの本があることもあるので、興味のある人物を調べるとき、ぜひ図書館を活用してみてください。人選は随分です

『ゴッホ 燃え上がる色彩』パスカル・ボナフー

「黄色、なんと美しい色だろうー」

1853年オランダに生まれ、死後「炎の画家」と絶賛された画家、フィンセント・ファン・ゴッホの37年という短い人生。ゴッホが描いた景色や、弟のテオに送った688通の手紙の一部、他の芸術家との関わりなど、様々な視点から語られている。

『ジャンヌ・ダルク』高山一彦

フランス解放の戦いの最前線に立ちながら、異端裁判で火刑に処されたジャンヌ・ダルクは、死後復権して、聖人に列された。昔から今まで語られている「聖女」像を、史実から追跡する。彼女の歴史から、変わりゆくフランスの歴史が浮かび上がっていく。

『メソポタミアの神話』矢島文夫

ウルクの都城で生まれ、神々から様々な贈り物をされたギルガメシュ。しかし彼は城主になるとともに、乱暴な行動を繰り返す暴君となり…

ギルガメシュ叙事詩

神々の宴会で、天界から地下界にご馳走をもつていってはいけない決まりになり、家来のナムタルにお使いを命じた地下界の女王エリシユキガル。彼女は戻ってきたナムタルに、あることを問いました。

ネルガルとエリシユキガル

(四年)

ピリオオバトルチャンプの読書記録

「広報読んだよ、なんとかバトル!」。十一月に入ってから何度か声を掛けられた。中央図書館主催のピリオオバトルに参加したのだ。知的書評合戦とも呼ばれ、バトルが五分間の本の紹介と三分程度の質疑応答を繰り返す、最後の投票でチャンプ本を決める。ピリオオバトルでチャンプ本に選ばれたのは初めてだった。読書量なら負けないうが、プレゼンとなる中々難しい。私は誰かに紹介するために本を読んでいるわけではないし、本から知識を得ようなんて高尚な考えもない。ただ楽しいから、面白いから読んでいます。

読書の楽しみ方は人それぞれで、同じ本を何度も読むもよし、早くたくさん読むもよし。たまに読むスピードや量を気にする人もいるが、個人差があって当然だ。読み方に偉いも何もない。私の場合は幼いころから読書が好きで、幅広いジャンルを好む。結果的にそれがさまざまな場面で生きていると感じることも多かった。そしてこれらの読書体験があったからこそ、実験の貴重さに気づけたと思う。本から得る知識と自分が身をもって経験することは全く別物で、どちらも大切なものだ。本をきっかけに行動することもあればその逆もある。図書委員として活動する中で、本の持つ力には何度も驚かされた。本は人を繋ぐ、本は人を変える。読書なんてつまらないと言っ人もいるが、彼らはまだ運命の本にであったことがないだけだ。結局は「面白い本を探しに図書館へ!」なのだが、本校三万冊の蔵書の中に、あなたの運命が紛れている可能性だって大いにあるのだ。(六年)

新刊紹介

- 『昨日、星を探した言い訳』 河野 裕
- 『文豪の悪態・皮肉・怒り・嘆きのスゴイ語彙力』
- 『美術館っておもしろい!』 山本文緒
- 『自転しながら公転する』
- 『完全版「20円」で世界をつなぐ仕事』
- 『モヤモヤそうだんクニック』

池谷裕一『ヨシタケシンスケ』
トリセツ・カラダ・カラダ地図を描こう』
海堂尊『ヨシタケシンスケ』

『いい教師の条件』 諸富祥彦
『空腹ねずみと満腹ねずみへ』

ティムール・ベルメシユ
『山口仲美全集へ』

『数学ガールの秘密ノート 確率の冒険』
朝永振一郎

『鏡の中の物理学』
『J.E. SPAN 老いなき世界』 馳 星周

『雨降る森の犬』
『たてがみを捨てたライオンたち』 白岩 玄

『リーダーを指す人の心得』 ハウエル・コリン
『13億人のトイレ 一下から見た経済大国インド』 佐藤大介

『感染症医が教える性の話』 岩田健太郎

『つそばっかり!』 竹内久美子
『あきらめない心』 天野 篤

『く刀は脳をどう変えるか?』
『ぼくが見つけたいはじめを克服する方法』

(五年)

冬期休業中の開館日・開館時間

12月21日(月)〜25日(金)

8時30分〜16時50分まで

始業式の日から開館します。

出会いのワゴン (前期)

今回の出会いのワゴンのテーマは、「映像化された作品」です。

『仮面病棟』 知念実希人

療養型病院に強盗犯が籠城し、自らが撃った女の治療を要求した。事件に巻き込まれた外科医・速水秀悟は女を治療し、脱出を試みるうち、病院に隠された秘密を知る。閉ざされた病院で迎える衝撃の結末とは。

『十二人の死にたい子どもたち』 冲方丁

とある廃病院に集まった十二人の子どもたち。全員自分の思いを抱えて死のうとしていたのだが、部屋には十三人目と思われる少年の死体があった。自殺を阻むこの謎を子どもたちは解くことができるのか。

『ブラックペアン 1988』 海堂尊

2018年、嵐・二宮和也さん主演ドラマの原作。「神の手」をもつ佐伯教授が君臨する東城大学外科教室に、帝華大の「ビッグマウス」高階講師が食道癌の手術を簡単に行える新兵器「スナイプ」を手土産に送り込まれてきた。

『精霊の守り人』 上橋菜穂子

女ながら腕の立つ用心棒であるバルサは、新ヨロ王国の皇子チャグムの命を救う。だが、この皇子は、不思議な運命を背負わされた「精霊の守り人」だった。百年に一度、卵を産む精霊「水の守り手」とは何か。そして、夏至祭にかくされた秘密とは…。

(二一年)

現実に向きあうとは

期末テストが終わり、今年行われる大きいテストはこれで終了した。しかし、一年というものはあっという間であり、一月になれば、また新たにテストが行われる。期末テストで散々な目にあつたのに、「まだあるのか・・・」と私の心は期末テストでできた傷に塩を塗るかのよう追い詰められる。そんなにテストで悪い点を取りたくないなら勉強したらいいじゃないかと思う人もいると思う。だが、今回私は、かなりの時間勉強して悪かつたのだ。そして私は思った。「現実から逃げたい！」そこで私は考えた。現実とは何か…。この疑問に直面したものはたぶん何人かいるだろう。そこで私は気が付いた。夢(寝る方)は現実から切り離されていることに。だから、つらいことがあれば寝ればいい。夢の中なら点が悪いテストでも許される。だが、どうしてもテストというものはある。これはあくまで嫌なことを忘れるためであり、何もしないということではない。つらいことを忘れるのが「現実逃避」であり、逃避した後、新しいことへと努力していくことこそが大事なのだ！そして、残りの西校生活に待ち受ける四十以上のテストを時々「現実逃避」しながらも努力を積み重ね、乗り越えていこうと思う。



(一一年)

新刊紹介

今年も伊予銀行社会福祉基金様より

寄贈していただきました。



『世間とズレちゃうのはしょうがない』

伊集院光／養老孟司

『講談社漫画学術文庫 エミール』 ルソー

『講談社漫画学術文庫 君主論』 マキヤヴェッリ

『お笑い芸人と学ぶ13歳からのSDGs』

たかまつなな

『これからの男の子たちへ』 太田啓子

『乙女の本棚シリーズ 山月記』 中島 敦

『乙女の本棚シリーズ 死後の恋』 夢野久作

『水を縫う』 寺地はるな

『苦しんで覚えるC言語』

『めんどくさがりなきみのための文章教室』

『人体を描きたい人のための美術解剖学』

『ウェブスター辞書あるいは英語をめぐる冒険』

スタンバー・コーリー

『きみはすごいぜ！一生使える「自信」をつくる本』

マシュー・サイド

『宇宙考古学の冒険』 バーカック・サラ

『赤ずきん、旅の途中で死体と出会う』

『いつの空にも星が出ていた』 佐藤多佳子

『夜明けのすべて』 瀬尾まいこ

『アンと愛情』 坂木 司

『類』 朝井まかて

『戦国の忍び』 平山優

『パンアメリカの文明論』 ヤマサキマリ／中野信子

『本屋のアンソロジー』

『和菓子のアンソロジー』

『ペットのアンソロジー』

『美女と竹林のアンソロジー』

『3時のおやつ』



(三一年)

編集後記

続々と秋作品が終わり冬作品に移行しようとしていますね。

私は、ふと思いました。作家の脳内辞書を書籍化したら面白い!? として売れるのではないかと。このような本を発売することによって作家の考え方が分かり作品に対して深く知ることが出来るほか、テストや模試などで引用される問題に対応しやすくなるのではないかと思います。模試で現代文の物語を読むときになぜ間違っているかは、単語の本来の意味を理解しておらず間違った意味でとっているからだと思えます(ただし書き問題は除く)。そのためこのような本が発売され、その本を読むことによって作家のおおよその使い方を知り、問題に対応し易くなると思います。ここまで話してきましたが、もしこのような本が書店で売られていたら私は買います。私は個人的には21歳さんのものが読んでみたいです。最後に最近買った本の紹介をして終わります。それは、『旅に出よう、終わりのゆくこの世界の果てまで』です。記憶を忘れる病がはやった世界の話です。設定が面白いので読んでみたい人は絶版しているのでネットで買ってみてください。(委員長)

